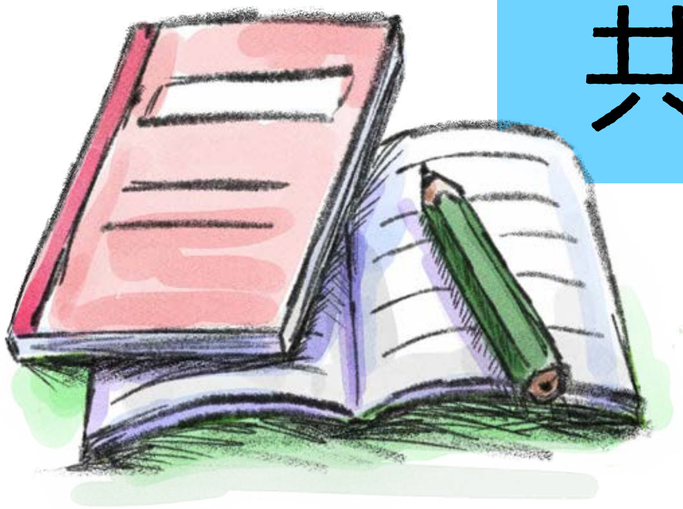
外国人幼児等の受入れに関する研修　1

基礎理論研修

言語・文化的に多様な背景を持つ子どもたちが共に過ごせる保育



公益社団法人 全国幼児教育研究協会

はじめに

【本講座の目的】

- 外国人幼児等やその家族を支援する際の基礎知識を学び
- 「言語・文化的に多様な背景を持つ子どもたちが共に過ごせる保育」を実現すること

【学ぶこと】

- 言語・文化はその人のアイデンティティの一部となる
- 2つ以上の言語環境がある子どもの発達について
- 複言語環境で育つ子どもをとりまく一般的な環境
- 複数の言語を支える「ことば」の力
- すべての子どものための多文化共生保育

内容

はじめに

1 なぜ多文化共生保育が必要なのか

1-1 保育者研修・養成の課題

1-2 日本の現状の理解 : 学齢期

1-3 子どもたちの背景は多様である

1-4 外国人幼児等の受入れにおける配慮について（文科省 2020）の目次構成

2 外国人幼児等を受け入れるとは

2-1「当たり前」を捉え直す

2-2 幼児教育の基本を見直す

2-3 新たな保育実践を創造する

3 言葉を獲得するとは

3-1 言葉の獲得の基盤

3-2 言葉は子どもの世界を広げる

3-3 言葉は「わたし」をつくる

3-4 言葉は文化

4 多文化環境で育つ子どもたち

ー園と家庭・地域で言葉を育むためにー

4-1 その人、家族にとっての「言語」「母語」

4-2 乳幼児期の複言語発達の特徴

4-3 複数の言語を学ぶ子どもたちの発達上のリスク

4-4 小学校以上での学習言語の発達につなげる

4-5 その子を理解するポイントに、発達の見通しと言語・文化的視点を加える

4-6 子どもたちにもある「前偏見」

4-7 保護者のエンパワメント『家庭』の潜在力とその周囲にある『社会資本』を開拓する

4-8 多様性と多文化共生保育の概念の確認

4-9 保育者にめざしてほしい専門性

基礎理論研修のその先に

さあ、やってみましょう！

研修を進める時に大切なのは…

- 園の先生方ひとりひとりの「捉え方」を出し合い、多様な見方を共有すること
- 多様な価値観があることに気づき、「答え」は1つではなく、幼児の状況に応じて指導の留意点は変わることを前提にすること
- 家族の言語を尊重することが、長い目で見たときの子どもの育ちに大きな意味があること
- 「言語発達」には母語の発達も入ること　**日本語の発達ではなく「言語発達」**
- 外国人幼児等の状況と学級の他の幼児との関わり等に着目すること

1

なぜ多文化共生保育が必要なのか

1-1 保育者研修・養成の課題

全般に、文化的多様性への対応について自信を持っている…

日本の教員　＜　他国の教員

多様性に対する配慮等に関する研修を受けていると答えた…

日本の保育者　＜　他国の保育者

管理職を含めて文化的多様性への意識や優先順位が高いのは…

日本の保育者　＜　他国の保育者

■OECD の国際比較調査による

国立教育政策研究所（2020）

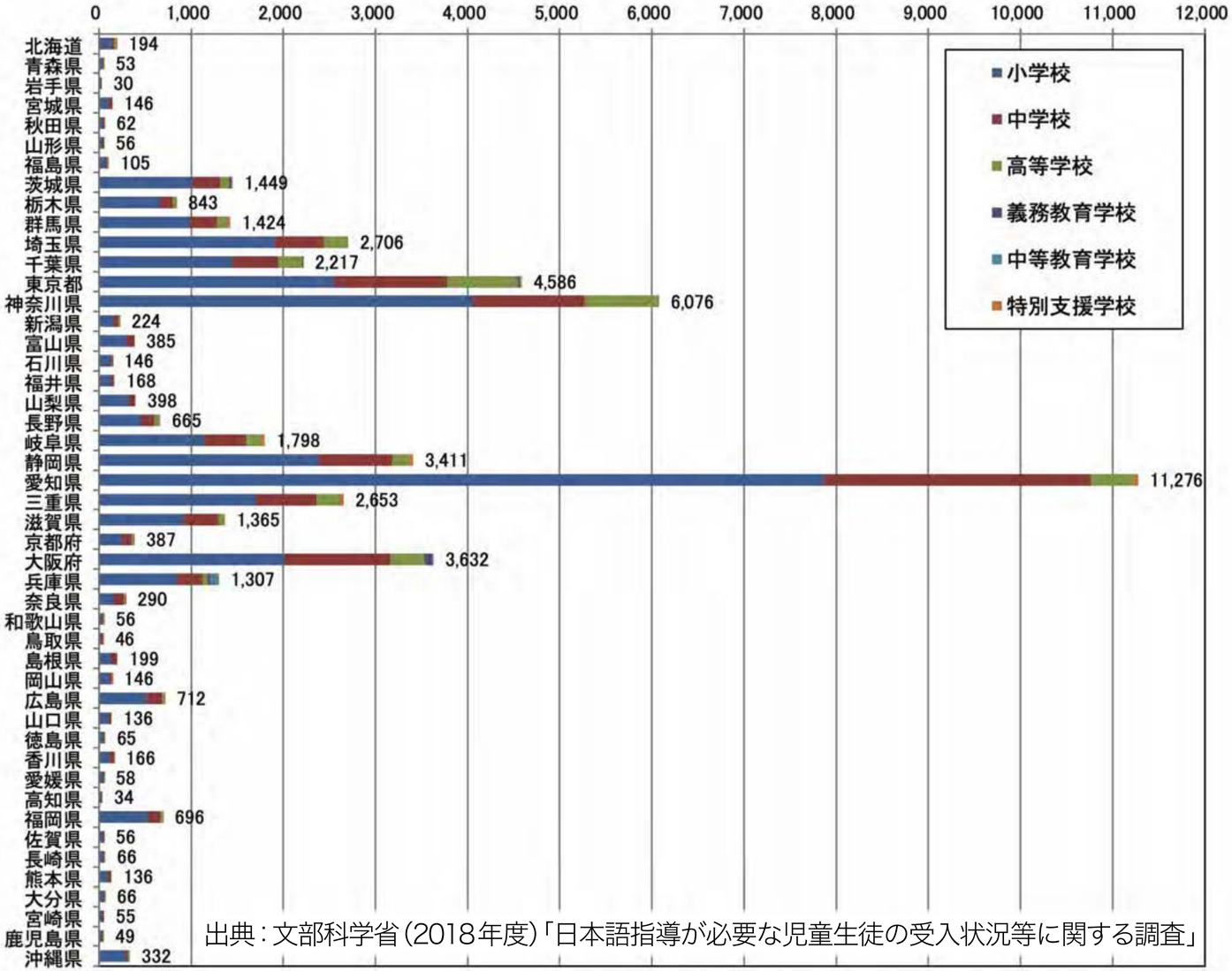
幼児教育・保育の国際比較　OECD 国際幼児教育・保育従事者調査 2018 報告書
―質の高い幼児教育・保育に向けて　明石書店

国立教育政策研究所（編）（2018）

TALIS 2018 報告書　教員環境の国際比較　学び続ける教員と校長　ぎょうせい

1-2 日本の現状の理解：学齢期

日本語指導が必要な児童生徒の学校種別在籍状況（都道府県別）※日本国籍・外国籍合計　（児童・生徒数：人）



出典：文部科学省（2018年度）「日本語指導が必要な児童生徒の受入状況等に関する調査」

家族滞在の外国人は、必ずしも都市部に多くいるわけではない

日本中どの地域にも外国籍の児童が暮らしている

1-3 子どもたちの背景は多様である

親の来日年齢、滞在年数、国籍

家族の文化、母国、宗教、価値観

家庭の言語（複数の場合は主な言語も）

子どもの来日年齢、経験、国籍

きょうだい構成、きょうだいの年齢や経験

子どもの成育歴 個性・興味・関心 発達の状況

家族の将来展望、保護者のビザ、職業、社会経済的状況

保護者の個性

地域のリソース
母語コミュニティの有無

「言語・文化的に
多様な子どもたち」
の背景は多様である

元来、乳幼児期の子どもの
育ちやニーズ、興味・関心は
一人一人異なる

幼稚園教育要領解説　第1章総説　第5節　特別な配慮を必要とする幼児への指導２の解説を参考に作成 p.129

1-4 外国人幼児等の受入れにおける配慮について（文科省 2020）の目次構成

【本資料の作成に当たって】.....1

1. 外国人幼児等の受入れにおける基本的な考え方.....3

2. 外国人幼児等の受入れにおける配慮に関する Q&A

（1）受入れにおける配慮

Q1 入園相談で大切なことはありますか。.....5

Q2 外国人幼児等の状況を知るために保護者に確認した方がよいことはありますか。.....7

Q3 幼稚園生活について伝えるときに留意することはありますか。.....9

（2）指導における配慮

Q4 外国人幼児等の指導ではどのような配慮が必要ですか。...11

Q5 幼稚園での生活に戸惑いを感じている外国人幼児等に対して、どのような配慮が必要ですか。.....12

Q6 なかなか日本語になじめない場合、どのような配慮が必要ですか。.....13

Q7 外国人幼児等の母文化等について、教師はどのような姿勢で臨む必要がありますか。.....15

Q8 外国人幼児等の健康管理ではどのような配慮が必要ですか。.....16

Q9 日本人幼児と外国人幼児等との関わりでは、どのような配慮が必要ですか。.....17

Q10 園内体制で留意することはありますか。.....18

（3）家庭との連携における配慮

Q11 保護者への対応で留意することはありますか。.....19

Q12 保護者への連絡ではどのような配慮が必要ですか。.....21

（4）関係機関との連携における配慮

Q13 小学校以降の生活や学習との円滑な接続を踏まえ、幼稚園で配慮することはありますか。.....23

Q14 入学に当たって、小学校とはどのような情報共有が必要ですか。.....25

Q15 外部の関係機関等との連携で留意することはありますか。.....26

2

外国人幼児等を受け入れるとは

当たり前を捉え直す

幼児教育の基本を見直す

新しい保育実践を創造する

2-1「当たり前」を捉え直す

■「わたし」の当たり前

■「わたしたち」の当たり前

■「保育」の当たり前

■「日本」の当たり前

お弁当にスープ？

水筒にジュース？

子どもにピアス？

頭を触るのはタブー？

2-2 幼児教育の基本を見直す

新たなまなざし、広げた枠組みで保育実践を見つめ直す

■保育は**子ども理解**から始まる

一人一人の子どものありのままを捉えようとするまなざし ＋ 発達の見通し ＋ 言語・文化的視点

■**環境を通して**行う教育

■**遊び**を通しての総合的な指導

■**一人一人**と学級集団

2-3 新たな保育実践を創造する

園全体で取り組む　ベテラン、若手、それぞれのよさを生かす

園全体で共通理解をもちながら、子ども理解を深め、援助の方法を考える

家庭・地域と連携しながら取り組む　園は日本の社会とつながる窓口

保護者を支え、家庭とつながる ▶▶ 園でのつながり（日本人保護者） ▶▶ 地域でのつながり（小学校、行政、地域コミュニティ、支援団体など）

保育に正解はない　子どもにとってよりよい実践をめざす

多面的に取り組む、重ねる、問い続ける

3

言葉を獲得するとは

言葉の獲得の基盤

言葉は子どもの世界を広げる

言葉は「わたし」をつくる

言葉は文化

3-1 言葉の獲得の基盤

伝えたい人がいて、伝えたいことがある

伝えたい人	伝えたいこと
信頼関係の形成	豊かな体験（生活・遊びの充実）
‖	‖
応答的な他者	身体をくぐった体験（直接体験）

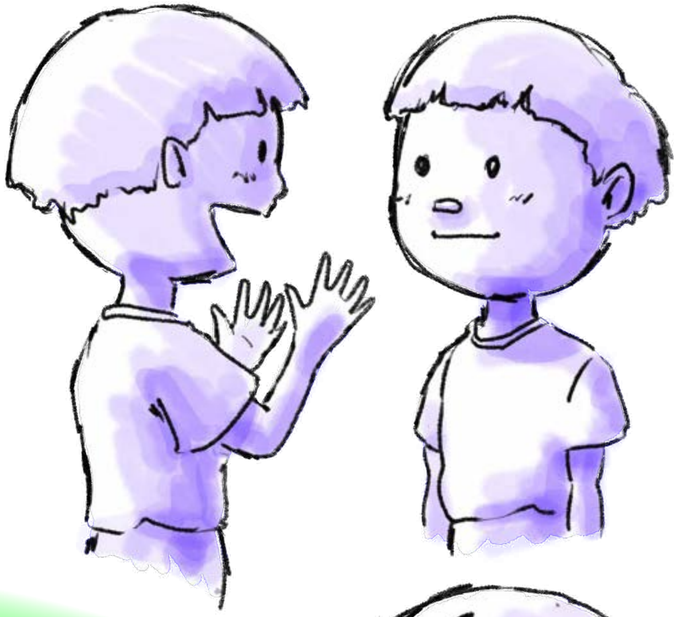
言葉は道具です。言葉という道具を使って、何をするのか？

なぜ、言葉が大切なのか？わたしたちにとっての言葉の意義を考えてみましょう。

3-2 言葉は子どもの世界を広げる

■子どもは言葉で人とつながる

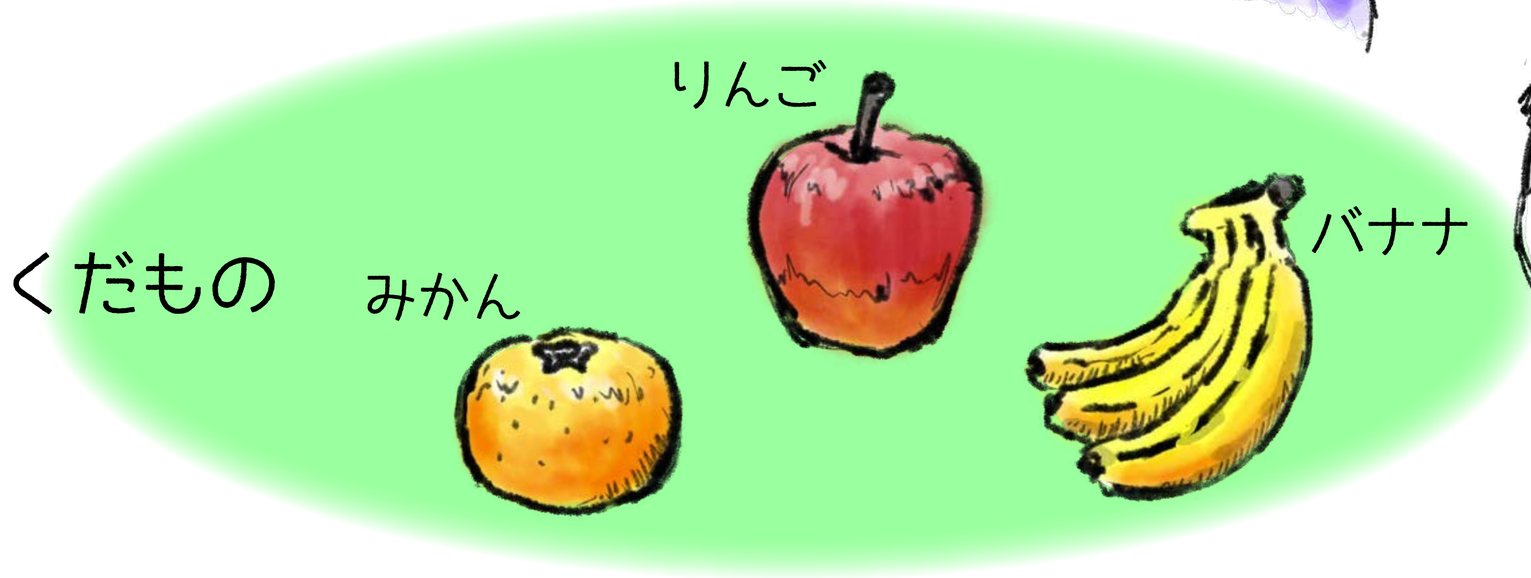
コミュニケーション手段（人との関わり）



■子どもは言葉で世界を知る

思考の手段（もの・こととの関わり）

概念形成



3-3 言葉は「わたし」をつくる

言葉は、自己表現の手段である

言葉は「わたし」の思いや要求・欲求を他者に伝える手段として生まれる

言葉は、子どもの内面世界を形作る

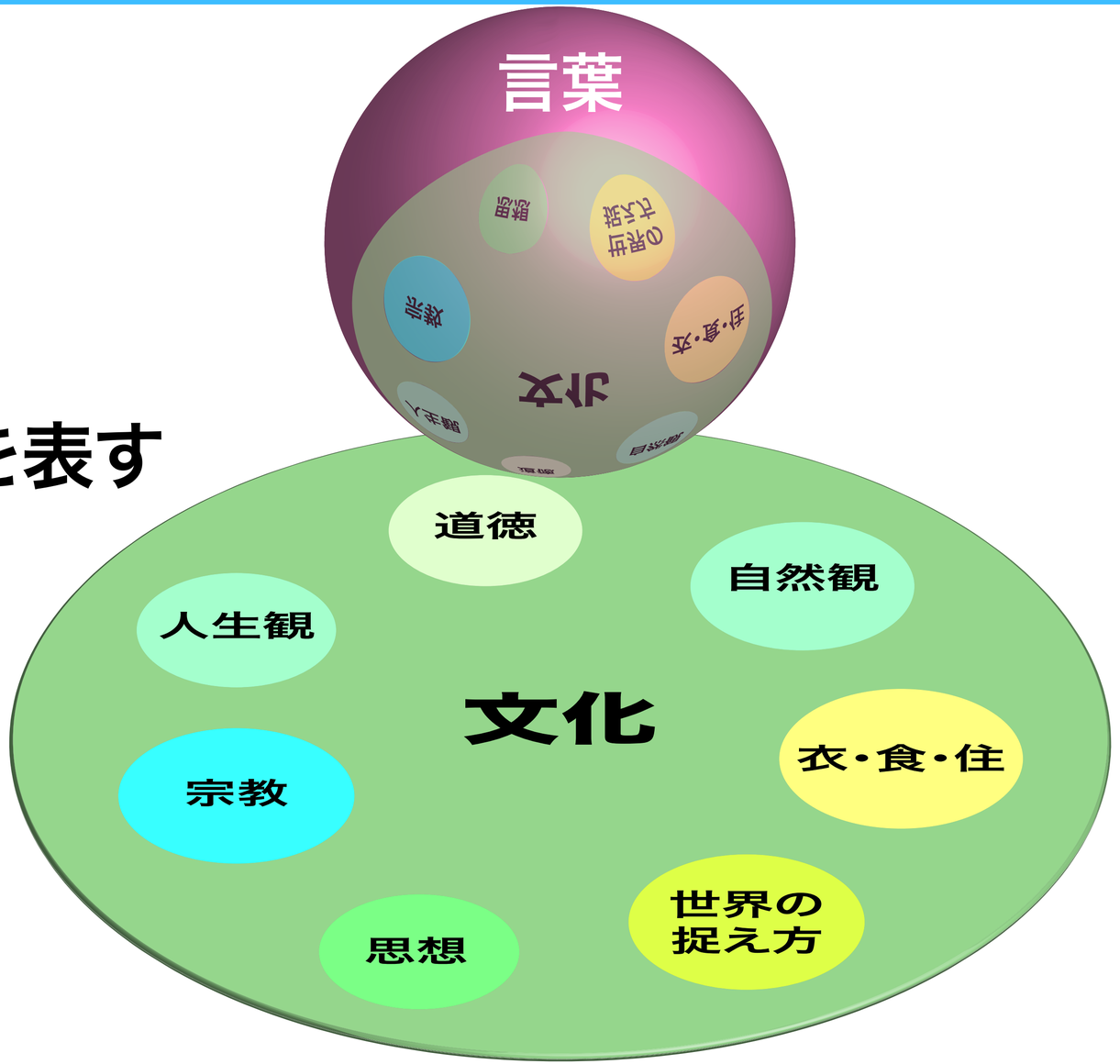
言葉は、自己制御(目標の達成に沿って自己の認知・感情・行動を制御するプロセス)に関わる

言葉は、アイデンティティの形成に関わる ➡ 母語の大切さ

3-4 言葉は文化

■ 言葉は、**文化の象徴**であり、
文化を映し出すもの

■ 言葉は、その文化の価値観を表す



4

多文化環境で育つ子どもたち

ー園と家庭・地域で言葉を育むためにー

4-1 その人、家族にとっての「言語」「母語」

■親の言語 ← 失ったときの痛手は大きい

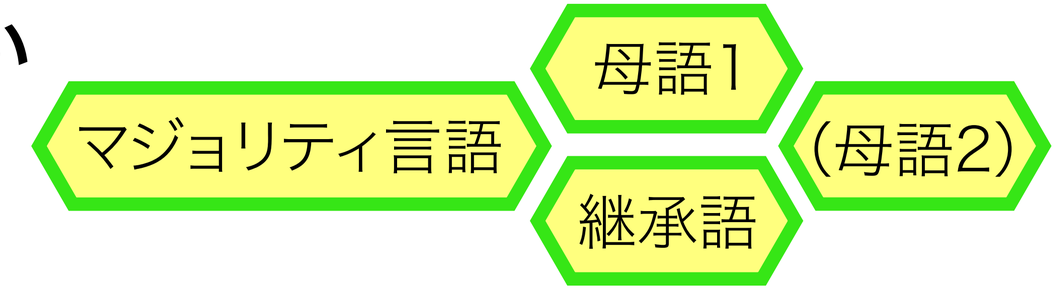
■育つ環境にある言語

■アイデンティティに関わる言語

・自分の文化を象徴する

・ルーツの文化へのアクセス

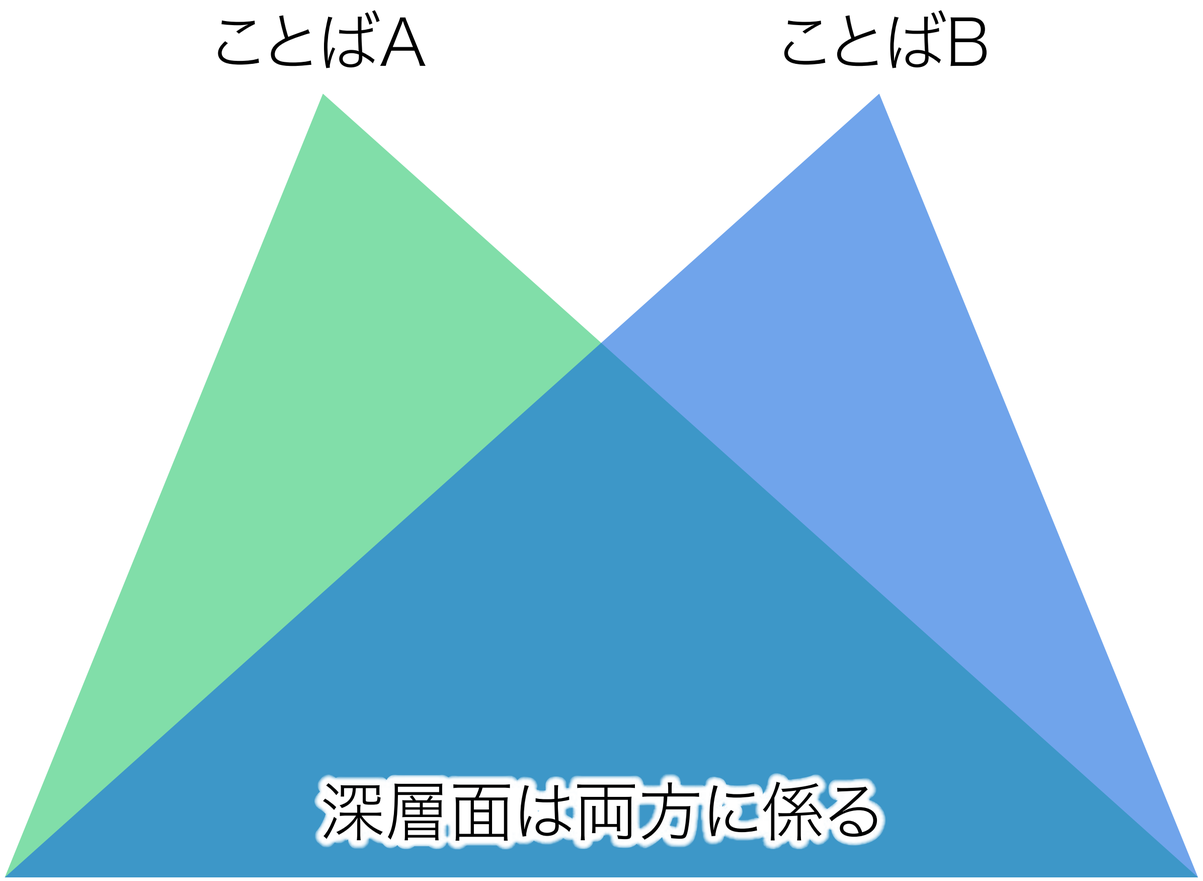
・日本語もルーツになる子どももいる



母語(家庭)が認知、社会性の発達を支えている

Dual Language Learners(DLLs)複数の言語を学ぶ子どもたち
どちらの言語も『価値がある』『大切』と感じられる環境が必要

4-2 乳幼児期の複言語発達の特徴



2つ以上の言葉を同時に習得していくことが可能

それぞれの言語での発達は就学前はゆっくりに見えるが、後にどちらも変わりなく発達

母語がしっかり発達している子どもほど、2つめの言語を取り入れる手がかりをたくさんもっている

カミンズ（1984）の二言語共有説（中島2016）

4-3 複数の言語を学ぶ子どもたちの発達上のリスク

トリリンガル

1言語ドミナント・バイリンガル

バランスのとれたバイリンガル

うまく使える言葉を失う
ダブル・リミテッドの状態

言語習得がしやすい時期は、
1つめの言語（親とのつながり）
を失う可能性が高い時期

4-4 小学校以上での学習言語の発達につなげる

生活言語
（会話の流暢度）

弁別的言語能力
（基本的文字や文型）

学習言語
（教科学習言語能力）

■日常会話で使われることばはある程度知っている

■日常の生活に支障がない程度に日本語が使える

■論理的な思考、抽象的な概念の習得につながる

■日常生活では必要がない言葉を含む

■「作文」につながる

発音がきれい≠言語力
語彙が増えているか？
文章の複雑さは？
「ことばの運用力」は育っている？

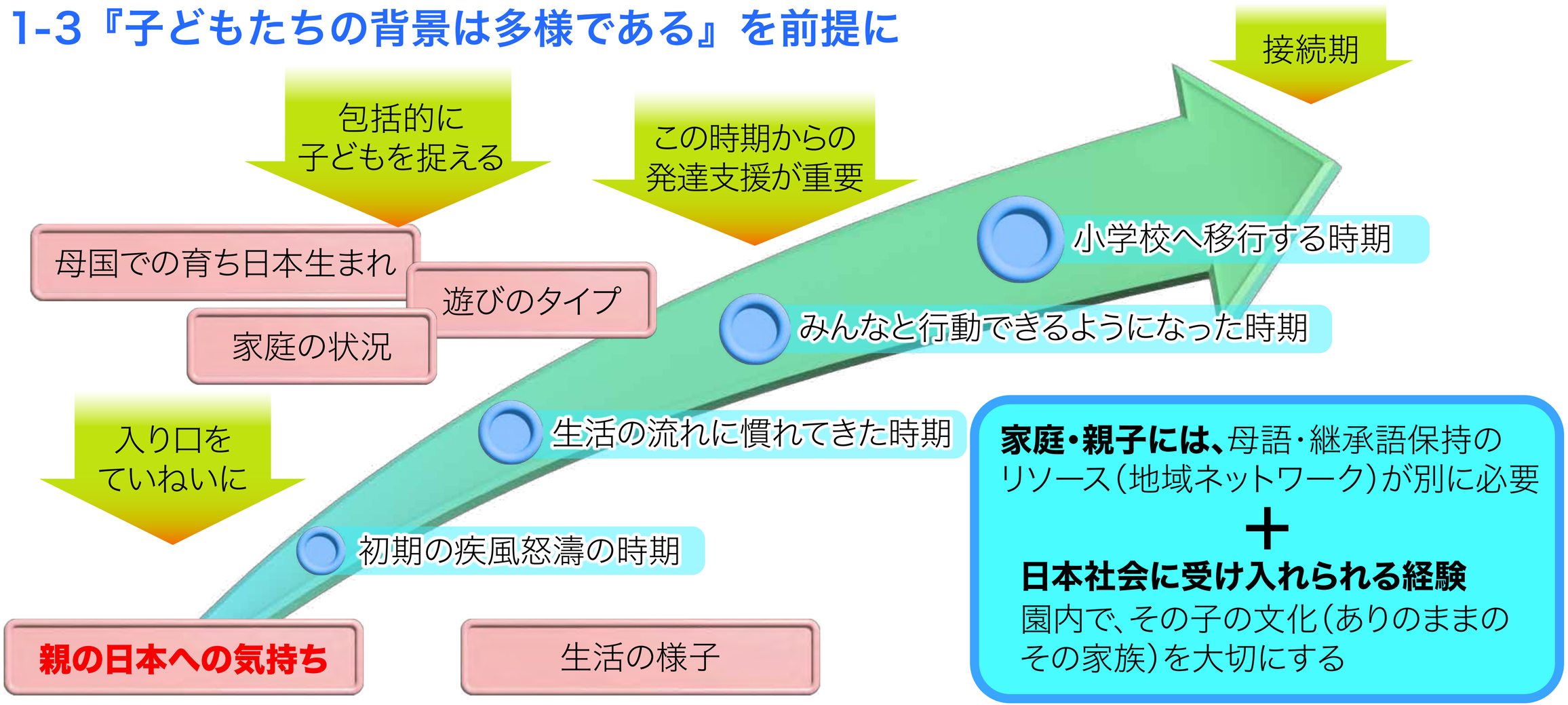
園で育てておきたい根っこの力

3～4年生頃に、学習言語が身につかないことに気づくこともある
家庭の学習環境・言語環境が豊かではない場合、日本語を主とする家庭でもリスクが高い

カミンズ（2009）　マルチリンガル環境におけるリテラシー獲得の教育的枠組み

4-5 その子を理解するポイントに、発達の見通しと言語・文化的視点を加える

1-3『子どもたちの背景は多様である』を前提に



家庭・親子には、母語・継承語保持のリソース（地域ネットワーク）が別に必要

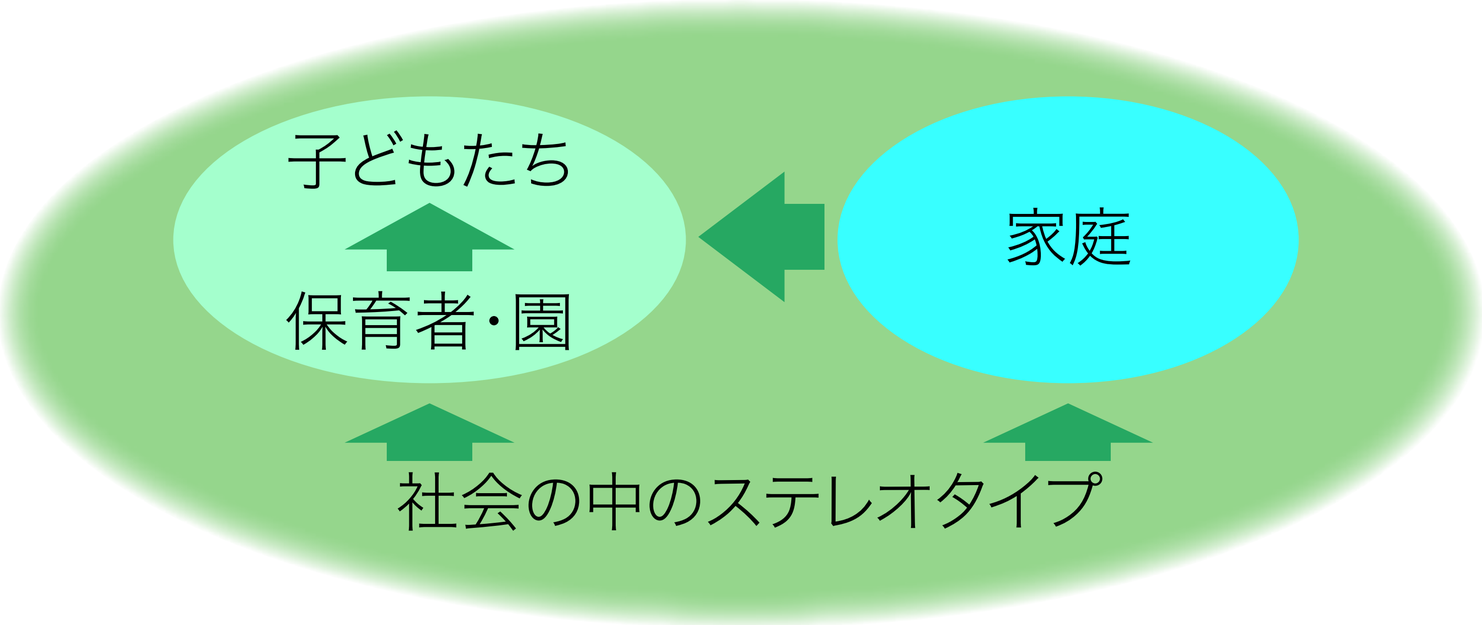
＋

日本社会に受け入れられる経験

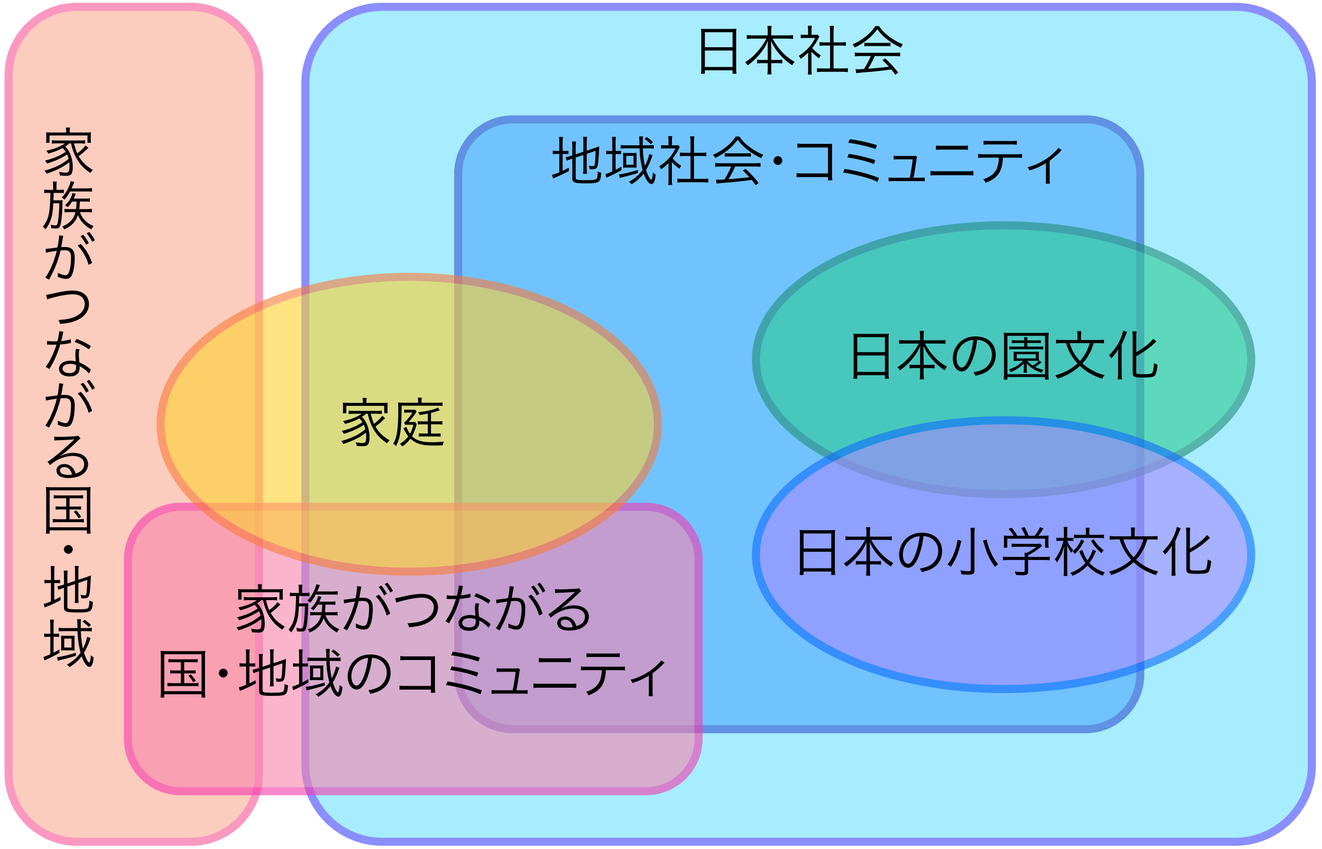
園内で、その子の文化（ありのままのその家族）を大切にする

4-6 子どもたちにもある「前偏見」

そのままにしておくと偏見や差別に
つながる「ものの見方・感じ方」
||
『前偏見 pre-prejudice』（佐藤 2012）



4-7 保護者のエンパワメント『家庭』の潜在力とその周囲にある『社会資本』を開拓する



いかに正確な情報を届けるか

■母文化コミュニティのネットワーク

■母国での資格・経歴は認められないが、スキルのある人たちもいる

■言語の壁で隠れている「見えない力」を尊重する

こども・家族の周りにある様々な文化的集団と資源（Uchida2003を修正、内田2021）

4-8 多様性と多文化共生保育の概念の確認

多文化共生保育は、誰も排除しないこと（インクルージョン）

どの子も、その子の持つ可能性を伸ばし、その子らしさを大切にする、お互いにお互いを大切にできる集団をめざす

すべての子どものための保育

「弱い立場」「社会構造上不利な立場」「マイノリティ」の『困難さ』は見えにくい

4-9 保育者にめざしてほしい専門性

異文化への感受性・応答性

偏見から自由な人間はいない
（自分の文化的な視座／見方に自覚的になる）

多職種連携を推進する力
地域ネットワークづくり

知識・技術・環境構成

知識・技術＆環境のもつ文化的メッセージを
自覚的に活用する

その子を理解した関わり

今まで考えたことがない「要素」異文化間の
相互理解の様を含めた子ども理解

基礎理論研修のその先に

■言語・文化的に多様な背景を持つ子どもたちは、保育の質の影響を強く受ける。個別の丁寧な関わりを含めて、豊かな経験、特に言葉を丁寧に支援することができるように。

■全ての子どものための多文化共生教育。誰もが複数の言語・文化をアイデンティティとして生活できる社会へ

テーマ別研修	多文化共生の学級経営
テーマ別研修	入園受入れ時の対応と保護者支援
テーマ別研修	外国人幼児等の言葉を育む
テーマ別研修	実践事例から学ぶ 園の特性に応じた保育